
転生の王子様

841

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生の王子様

【Zコード】

Z3292X

【作者名】

841

【あらすじ】

とある日俺は定番の神ミスで他界。転生させてくれるはいいが、俺は平和な所がいいんだ！！……ということで生まれ変わった所はなんとテニプリ。まあ此処に来たんだからテニスくらいはするかあと考えている呑気な少年のテニプリライフ、見てみますか？

誕生した王子様

人って死んだらどうなるのだろうか。そんなのを考えた事がある人、俺が答えを教えてやろう「うじやないか。

あの世パターンもあるらしい。だが、神様ってやつが失敗をして死んでしまって言う、小説では定番のパターンもあるらしいんだ。さて、俺はどうなのかねえ。田の前にはおじーさんが一人。

「すいませんでしたすいませんでした、すいませんでしたああっ！」

「いや、そこまで必死にならなくても……。で、何故俺はこんな場所に居るんですか？」

「こんな場所、って言つのはこの真っ白い空間の事ね。おじーさんと俺の一人ぼっちの空間でござりますよ。……アレ、自分で言つておいてなんか虚しいぞ？」

「こや、その……///」

「はい、わかりましたー」

やはり定番だった！え、でも俺も「ちょっとと生きてたんだよなあ。そう考へるとマジショック！」

いや、こんな俺にも一応彼女という者はいたのでね？腰まである綺麗な黒い髪に、ビックリするほどに大きい目。小顔で足がすんげ

え長かった。とにかく良い彼女だったのよー。性格も良いしー。

「や、その……」

「んえ？ あ、転生させてくれんの?」

「そ、それくらいで済むのな? ……」

それくらいで済まないくらいの大儀となるのかよー? ……まあ、いいか。

「ただ単に平凡な世界で良い。バトル系とか、行つただけで死にそうな所は絶対にお断りしておきます。平和に過ごせそうなところな?

「わ、わかりましたあーっ!」

熱いね、めじーさん。そんなに!!スッてやつは大きかったのかい?

気づけば俺の視界は暗くなっていた。……マジでこの間にじだよ。まるでつこていた電気を、急に消された感じかな?

……いや、違うな。俺、目え黙つてる。無意識! ? 無意識ってなんか恐くないつすか! ?

「あ、おかーさんー動いた! 動いたよー」

「ホントねえ。フフフッ。話しかけてみたらどうへ反応してくれるかもよ?」

「う、うんっ…」

およ? 何の声だ? 男の子の声と、優しい女人の声。……でもつて「ごご何処だ?

「お、おにーちゃんだよ? げ、げんきにっ、つまれてきてね?」

おにーちゃん? つまれてきてね? ……ああ、転生小説なんて何度も読んだ事があるから、どういう状況かわかった……。

「こはまかのお腹の中かよ! ? こーかこには何処の世界だよ! ?

「うう……。お、お腹が……う」

「わああああ! ? お、おかーさん、だいじょーぶ! ? お、お医者さん! ?」

んー? お、女人、大丈夫か……つてアレ? これは……まさかの……

生まれるパターンですか! ?

おう、なんだか気が遠くなってきた……。アー……。

「生まれましたよー元気な男の子ですッ！」

「へ、うまれた……」

…………んお？あれ、俺つてば氣でも失つてたのか？つて、何故だ！
涙がこみ上げ……、

「オギヤアアア！オギヤアアアア！」

「あ、泣いた！良かつたあ……泣かないからビックリした～！」

「ウオギヤアアアア！？オオギヤアアアア！」

「ぬおつー？すん」い元気な赤ちゃんですねー。ウォギヤアアつて泣
いてますよー！」

「元気で良かつたわあ……っ」

なんだこの美人なお母様はー？でもつて俺はなぜ……なぜ！？

ダメだ、言葉にならない！でもつて涙がとまらない！んだあああ、
ダメだーとまらない……！

「名前は決まってるんですか？」

「フフ、まだなのよ……じゅじゅつかしさりあ～」

後に聞いた俺の名前は、ようた。漢字書きではわからない。

まあ、そのうち分かるだろ？」「いや。……とこつか、マジでこじまへんな感じうかね？」

確信した王子様（前書き）

どうも、841です。

転生の王子様、第2話でございます。

そして、なんと……お気に入り登録が4件！…感想が1件…！
ありがとうございます。

これからも一生懸命頑張っていきます！

では、どうぞ。

確信した王子様

「よーた！」

明るい声で俺に話しかけてくれんのは、周兄。何故かいつもニッコニコしている一見人づきあいよさそうな兄さん。

「こちらの世界に生まれ変わった俺は、今現在5歳。周兄は7歳でもう一人上の兄さんは裕兄。

「テニスしようよー」

「……テニス？周兄、俺、テニスには興味無いんだけどなあ……」

「絶対によーたのセンスはいってばー僕が教えてあげるー」

無理矢理ぐいぐいと腕を引っ張られ、連行される。

「どうか未だにここが何処か分かんない俺。あ、でもうすうすわかってるんだよ？だけど自信もってはいえないんだよなあ」。

「よーた！聞いてる？」

「えつー?」、「ごめん、周兄！」

「全く……陽太はすぐに物思いにふけるよねー」

ムスッと言った感じの周兄。「ごめんね、周兄ー。俺、精神的な年

齡絶大だから！

「う見えても赤ちゃんのころはすぐ頑張ったんだけど…？だつて俺、本来は赤ちゃんなんかじゃねえんだからな！？もういろいろと頑張つた！うん！」

「……陽太、聞いてるの？」

「へ？」

「よーたつ…！」

「うわああああっ、『』めんつてばあつ…周兄ーつ…」

「兄貴！俺にも…つて陽太、どうしたんだよ？」

「裕兄ー！助けるおおおおおおつ…！」

「裕太つ、陽太を捕まえてほしいんだけど…！」

こんな俺、不^{ふじょう}陽太の日々。

至つて平凡であり、意識を何処かに飛ばしてしまつて、周兄に追いかけまわされる日々である…

「ほりつ、よーたー！」ひやつてラケット握るんだよ？聞いてる？」

「聞いてます聞いてます…」

テニスかあ……。そういうや、元いた世界にテニスの王子様つて漫

画が……。

……つて、漫画が……。たし、か……あつたよな?すぐ飽きてポイした様な氣もするんですけどね?

「ここに」不一、周助は……。うーんと……。

「陽太……聞いてるの?」

「聞いてます!」

お願いだから開眼しないで、周兄。マジで怖いから!

話を戻して……いたような氣もするなあ。そう言えれば俺、桃つてやつが何故か好きだつたんだつけ?でもつて……どんなストーリーだつたつけなあ?

確かにスーパールーキーがやつてきて……様々な敵と戦つて……強くなつてくみたいな!?

「それだあつ!!」

「え! ? 何がそれなの、陽太! ?」

「あ、ごめん。なんでもないよ」

たぶんここにはテニスの世界だ。テニスが中心の世界があ……。

此処に来たからには、テニスした方が良さそつだな。いろいろな意味であるが。

「……はい、陽太。今の奴、繰り返してみて、わかるよね？」

「え？ あ、その……」

「わかるよね、ちゃんと話聞いてたんでしょう？」

「え、えと……」

「よーた……！」

「うひ、じめんなさい、周兄ーっ！」

絶対俺嫌わてるよね、周兄に！ ！ 話聞かない弟だ、見たいな感じで！

とりあえずラケットを改めて握り、俺は周兄にテニスを教えてもらひつ。一度調子に乗つてラケット振り回したら頭を軽くじつかれた

……。

「陽太は、きつとうまくなるよ」

「そり……かなあ？ へへへッ、ありがとうー周兄！」

なんだかんだ言つても周兄はすぐ優しいんだ！ ！ 俺の自慢の兄さんやーー！

あ、もちろん、裕兄も自慢の兄さんだからなー！ ？ 忘れちゃだめだぞー？

確信した王子様（後書き）

不二の弟設定になりました。

手塚・幸村・不二・越前・跡部の5人で迷ったのですが……。

越前は1年生なので同時に中学には入れないし……。

手塚はまあ良かつたのですが、なんか難しそうで……。

跡部は841があんまり好いていません（

幸村は……とにかくヤバそう。だつて五感ですよー♪ゆつきーのテ
ニヌは五感を奪うんですよ！？
と言つ事で、名前も先に「ようた」に決まつてたし、「ゆうた」と
似てるし。

不二でいいか、といつ考へにまとまつましたvv

今回短いですねえ……。長い文書へのつてしんじいです。
読んで下さり、誠にありがとうございましたー！！

裕太とHIDE様（前書き）

今日は裕太が中心です。
ページが増える様頑張りますッ！

あれから月日は経ち、俺は小学6年生になった。周兄さんは中学2年生、裕兄さんは中学1年生。

兄さん達に対する呼び方も変わったし、テニスの実力も変わった俺。

この間、周兄さんと全力で試合をしたんだ！とにかく周兄さんはすごかつた！でもって、俺の体から妙なオーラが出た！いや、現実逃避じゃないよ？

で、結果は！なんとか俺が勝つた！終わつた後は疲れきつて倒れたけど、すごくうれしかつた。

「にしても周兄さん、強かつたなあ……」

「……ねえ、知ってる？独り言を言う入つてエロいんだよ？」

「はー？」

人が嬉しさに浸つているときに何を言つかー？

いきなり口を挟んできたこいつは、小林柚子。^{「ぱやしづず}テニススクールで知り合つた女子で、結構仲も良い。ちなみに柚子は結構テニスがうまい。

肩くらこまでの茶色い髪と、丸く綺麗な黒目をもつ柚子は、結構男子からもモテる様だ。

「いや、ちょっと嬉しい事を思い出してな？」

「ふーん。そんなに嬉しい事だったんだ？」

「そりゃあもうー！」

なにしろあの周兄さんに勝てたんだー！そりゃあもうたけど、やっぱり嬉しい！

「なに？ テニスで誰かに勝ったの？」

「……お前つてやつぱり勘いいよな」

「あ、あつてたんだ？」

柚子の勘は良く当たる。そりゃあもう恐ろしそうだ。

「まあ、どうでもいいけど、もう下校時間なんだよね。私、今田当番なの。早く帰ってくれないと、私が帰れないんですけど？」

「あー、はいはい。帰るつて。帰ればいいんだー！」

黒いランドセルを背負い、俺は教室を出る。

あ、そりゃええば、変わった事がひとつあった。……裕兄さんの事だ。

裕兄さんは、元いた学校、青春学園を去ってしまった。そして、家をも出て行ってしまった。理由を聞いたけど、二人とも表情を沈めるだけで、答えてくれなかつた。

何処に居るのかも、何があつたのかも俺には分からぬ。……原作覚えておけばよかつた。

「……はあ、俺つてホント馬鹿だなあ」

つづづく自分に呆れる。……つて氣づけば校門出てたし。やっぱ無意識つて恐いな！

裕兄さんに会いたいなあ。何処に居るんだろうな。

「……陽太？」

「え？」

この声は……裕兄さん！？

期待を込めて振り返れば、そこには久しぶりの裕兄さんの姿があつた。

裕太 side

俺には、一人の兄貴と一人の弟がいる。

兄貴も、弟の陽太もテニスがうまい。特に陽太は、あの兄貴に勝つたらしい。

正直、悔しかった。俺じゃなくて、陽太が兄貴を先に倒したんだと思うと。でも、それと同時に嬉しかった。

陽太は、始めは全くテニスに無関心で、やり始めてからもあまり興味は見えたかった。そんなアソイツが、今では兄貴に勝てるほどに強くなっている。本当にうれしいんだ。

でも、俺は兄貴より強いなんて事はない。それに、俺は中学に入つてから……。

「あ、おい。あの不二周助の……」

「知ってる。天才・不二周助の弟で……」

「不二周助の……」

「天才・不二周助の……」

天才・不二周助の弟、としか俺は見られていなかった。

はじめは耐えることができなくなっていた俺は、無論そつちに移ったんだ。

そんな時だつた。「聖ルドルフ学院中学校」テニス部の観月さんから、ルドルフに来ないかとスカウトを受けた。

もう耐えることができなくなっていた俺は、無論そつちに移った。

この事を兄貴達に言つたときは、酷く驚いていたつ。

「陽太は……どうするの？」

兄貴に言われた、一番言われたくない言葉だった。陽太には、絶対に知られたくなつた。

言えればアイツは、俺を待つというと思うから。俺は帰るつもりはない。だから、そんな期待なんかさせたくないんだ。

アイツの笑顔を、俺が消したくない。

つてダメだな。気分でも紛らわせないと……。散歩にでも行くか？

「そっち行つたぞー！」

「オーライオーラーイツ！」

野球をしている小学生の姿が目にに入る。……小学生、か。

陽太も卒業式が近いよな？見には行きたい……けど、無理か。

最近、アイツの笑顔も姿も見てないけど、元気かな？なんて思つてた時だった。視界の隅に、見慣れた背中が映る。

もしかして……？と期待をして、その背中に近づき、声をかけてみる。

「……陽太？」

「え？」

やつぱり期待通りだった。陽太だ。

俺がずっと見たかった笑顔を、陽太は一番に見させてくれた。

「裕兄さん！」

「元気そうで良かつた。今、帰りか？」

「まあなっ！」

嬉しそうに笑ってくれる陽太は、本当に変わっていない。どちらかと言えば兄貴に似ている容姿だけど、口調は俺似らしい。

「裕兄さんは……元氣で、やつてんの？」

「あ、まあな……」

だんだんと陽太の表情が暗くなつていぐ。……どうしたんだ？

もしかして「コイツ、俺が家を出て行つた理由を知らないのか？ああ、そういうえば。俺が理由を兄貴達に話した時、兄貴、陽太にいたくないつて顔してたつけ？」

「……裕兄さん、なんで帰つて来ないんだよ？」

「……っ」

相変わらず直球な俺の弟。
ストレート

「周兄さんや由美姉さんにも聞いたんだけど、教えてくれないんだ。
だから、裕兄さんに直接聞くよ」

「おま、相変わらずストレートだな？」

「え？……そりへ？」

やつぱり陽太は変わっていない。どんな時でも、俺を笑わせてく
れる。

そんな陽太が俺は大好きだから、こんなにも悲しませたくないな
んて思うんだろうな？

「悪いけどさ、陽太。……今は、言えないんだ」

「え？ なんで？」

きょとんと言つた感じで聞いてくる陽太。

「なんでもだ。でも、俺は帰らない。今は寮で暮らしてるんだ。そ
つちの方が落ちつてしまつて、俺はそこにいるつもりだ」

「…………そつなんだ」

俯いてしまつた陽太。だから言いたくなかったんだよ……。

「よ」

「じゃあ、や？」

パツと勢いよく顔をあげて、陽太はいつも陽太らしい笑顔を見せてくれた。

「とにかく、俺は待つてるよ」

「だから、帰るつもりはないんだって……」

「でも、待つてるって！」

やつぱつといつは、予想通りの答えを言つ。ほんとわかりやすいな。

「だつて俺、待つことしかできないだろ？」

「はあ……。全くお前はヤ……」

「はいはい、馬鹿で」めんな?裕兄さん

「…………」

でも、正直言つと嬉しいんだ。きっと何処かで、陽太に忘れられるのを怖がつてたんだ。

それでも、陽太が待つてゐつて言つてくれたから、今、すごく体が熱い。

……馬鹿でわかりやすく、一人の兄よりもテニスの上手い弟。

でも、そんな弟の事が俺は大好きだ。たぶん、いやきっと、兄貴

も同じだと思ひ。

辛い時、一番に笑顔をくれるの陽太だから。俺だって昔からそうだ。それに、ほら、今もだ。

「……ありがとうな」

また陽太のおかげで、心が少し軽くなつた。

s i d e o u t

……久しぶりに裕児さんと話せて凄く嬉しかつた！

やつぱり裕児さんは優しくて、変わつて無かつた！しかし理由をきけなかつたのが、すんごく悔しいんだよな……。

でもまあ、いいか？

「……あれ？俺つて転生したんだよな？」

最近自分が転生したことを忘れそつになるなあ。

それくらいに、テニプリの世界やテニプリのキャラに慣れてきたんだろ？なあ……。

まあ、それはそれでいいとするか？

「にしても、テースつて結構楽しそうなあ……」

「結構、じゃなくて、やつぱりの間違いじゃないかな？」

「え？」

後ろを見れば、周兄さん。いつの間に居たんだ？

「あ、お帰り周兄さん。今日は早かつたんだ？」

「うん。で、陽太はまだいるかと思つて小学校の近くに来たら、ボーッと立つていたって訳」

「ボーッとつて……なんか失礼だなあ？」

「『めん』『めん』。一緒に帰るつか、陽太」

「もううんー。」

裕兄さんとも久しぶりに話せたし、まあ、今日は良い日だつたな！

裕太と不二様（後書き）

次回から中学に入つていきます。

テニス部のメンバーがやつと出せて行けそうです！

今回は陽太以外の人物目線も入れてみました。

裕太はかなりの弟思いです。不二（兄）に似て。

今回出てきたもう一人のオリキャラ、柚子ですが。
まあ、ぼちぼちでてくると思います（笑）

ちなみに陽太はテニス強いです。

うーんと……不二（兄）よりもちょっと上、ぐらいです。

これからもっと強くしようかと（笑）

中学生様（前書き）

さて、いよいよ中学です。
誰から関わって行きましょうかね?
とにかく頑張ります！

周助 S i d e

「不つーう！アレが言つてた弟～？」

「うん、そうだよ。すごく緊張してた男の子。あれが弟の陽太」

入学式が終われば、英一が僕に話しかけてきた。

今日は青春学園の入学式で、いわゆる陽太の中学校レビューだ。入学式では転んだりしないかなと心配してたんだけど、まあ大丈夫だった。

制服姿の陽太を見れば、嬉しさが凄くこみ上げてきた。

「やっぱ不一と似てたなあッ！すぐに分かつたよっ」

「でしょ？姉さんが言つには、容姿は僕に似ていて、性格は裕太に似てるらしいね」

「テニスの実力とかは？」

「 わあ、わざわざひだりにならうな」

教室に戻りながら話していると、またさつきの陽太の姿が蘇る。

陽太の栗色の後髪は耳の下くらいまでありて、前髪は強制的にひとつに結ばせた。まるで女の子見たいだつたのを思い出しつゝ、すこし笑つてしまつ。

つまりは額が丸出しの状態、と言えばわかるかな？でも本当に似合つてゐるんだよね。

さてと。陽太が中学校生活を楽しく送れる様に、僕も一年間だけじつかりサポートしないとな。

side out

……恥ずかしい。

いや、入学式で失敗したとかじゃない。前髪を上で結んでいるからだ。

朝、周兄さんに言われてやつたこの前髪。もちろん嫌だといつたら、俺は。だけど、だけどだ。

あの周兄さんに開眼されて、すくごい圧力かけられて、尚も嫌と言ふると思つか？

……俺の答えはフロだ。実際そうだったしな。

「ねえ」

「え？ ああ、なに？」

「アリ邪魔なんだけど。どうでくんない？」

「あ、『めぐ』」

初会話がコレかよ！？誰だこいつー？言ひとくけど、実は俺お前なんかよりもかなり上なんだぞー？

まあ、確かにボーッと立つてた俺も悪いんだけど……。

ちよつとむしゃくしながら配られていたプリントで俺に今声をかけたやつの名前を見る。

「越前リョーマ」

「……なに？」

「あ、なんでもない。気にすんな」

聞こえてたのかよ……。

にしても“越前リョーマ”か。……そんなキャラいたっけかあ？

いや、もうテープリなんて興味無かったから内容忘れてるし。にしても、たぶん主人公もこの学校だったと思うんだけどなあ……。ビニツなんだわつ。

あ、とにかく越前にテニスをするか聞いてみよつー。

「えーっと……越前、くん？」

「なに? とか、アンタ誰だっけ?」

「……不二陽太」

「ふうん。で、なに?」

「越前君もさ、テニスとかしてんの?」

「……まあね」

「え、してるんだ」

「それが何? 別にアンタには関係ないでしょ?」

「え、あ、『』めん」

……なんで謝つてんだろ、俺。

でも一応、ここつもテニスするんだ。じゃあテニス部で関わる可能性、ありかな?

しかしだ! こんな生意気な口悪い奴が主人公の訳はないだろ! 一

「……ねえ」

「なんだよ」

「プリント。落ちた」

「あ、どうも」

……会話が長続きしないのは何故なのだろうか？

まあ良い。ちなみにさつきの言葉は微訂正する。彼にも優しい面はある様だ。

「あ。ねえ！」

「……今度は何だよ？」

「さつや、『越前君も』って書いてたけど、アンタもテニスすんの？」

「あ、うん」

「ふうん。……アンタ、強いの？」

……強このだらつか？自分では良く分からんだけど。

「わからぬ。こいつの場合さびしつらべばいいのかも、俺は良く分からんんだが……。

「わからない。こいつのこと、また今度試合する?」

「……いこよ」

それきつ前を向いた越前。……もう越前でいいよな？

クールな奴だなあ、越前つて。にしても主人公はマジで誰なんだろうか？俺、ホントよくわかんないんだよな。

そんな時、俺の席の隣に誰かが座った。おっと、もう座らなきゃいけないのか。

という事で俺も自分の席に着く。すると、隣の席に座った奴が、すごく笑って話しかけてきた。

「よお！俺、堀尾！隣の席、よろしくな！」

「……不一陽太。よろしくな、堀尾君」

「堀尾で良いよ！俺も不一って呼ばせてもううし！」

「んじゃ、堀尾ね」

とにかく一人、友達ができたのかな？うん、そういう事にしよう。

にしても“不一”だったら、周兄さんと被る様な気もするが……まあいいか。いや、良くないか？

「なあ、堀尾。俺の事、陽太って呼んでくれたらいい

「え？陽太、でいいのか？」

「うん。三年にも不一って人いるの、知ってる？」

「ああ、知ってる知ってる！青学テニス部で有名な不一先輩だろ！
そういうえばお前、同じ名字だな！」

「あつはまな……」

兄弟です。

ん? にしても、堀尾はテニスの事を詳しく知っているのか?

「堀尾、テニスすんの?」

「よつぐで聞いてくれました! 僕、テニス歴一年なんだ!」

「一年?」

「やう! テニス歴一年! ま、テニス知らない奴に言つても意味無いと思つけどな! こう見えても俺は……」

それで、読書でもしようか!

……いや、耳疲れるし。たぶん堀尾、そんなに強くないと思ひます。直感だけだ。

部活は今日からでも行けるらしいが(仮だけど)、周兄さんが昨日「明日は僕達はいないから、本格的な入部は明後日からだと思つ」って言つてたな。

んじゃあ今日は帰るか。面倒くさい事があつても困るし。

「陽太!」

「つー?」

田の前に「コシ」と現れた顔に俺はビビを抜かれる。……マジでビビった。

「前髪意外にも似合つてるよー」

「棒読みで言われても自信わかんないって……柚子」

「あつははーうそー！陽太と同じ前髪してる子いたけど、陽太の方が全然似合つてもん！」

「……余計に自信無くなつた」

男の方が似合つてるつべりつこう事だよ、おこ。

昔から、周兄さんや裕兄さんに結構童顔つて言われてきた覚えはあるけど……ここまでとは。

「で、なに？柚子、やつぱテース部はいんの？」

「あつたつまえじゃんつー女テニだよ、女テニーでもつて絶対に陽太を倒すからー！」

「はいはい、のんびりとお待ちしてありますー」

「うわ、なめてるでしょ？」

やつぱり柚子は女子テニス部か。……やっぱ俺もテニスじゃないとな。

あ、でも周兄さんと被るか……。いや、逆にテニス部に入らなかつたら開眼されそだな。アレ、何か寒いぞ？

その後は先生の話をきき、後は部活の申し込み……だが俺は行く気が無い。

そんな時だつた。

「……何帰ひうとしてんの？」

「は？」

顔をあげればまさかの越前！めっちゃ睨まれてるんだが。

「いや、なんとなく」

「テニス部入るんでしょ、アンタ。不ー…………だつけ？行かないの？」

「行く気はない！」

「……なに格好つけ言つてんの？」

「アレ？ つっこみ上手？」

とにかく俺、行く気ないんだけビザ。セヒ、ビツサッてまいつかな？

「まあ、行く気が無いんだつたらいいけど」

あれ、まけた？

……でも目がかなり鋭い。これは行った方がいいかもなあ……。

一応テニスバッグは持つてきてるし……ラケットは一本しか入れてないな。あ、パワーバンドは二つ入れておいたっけ。

まあ、損になる様な事はないだらうし、行っておくか。

「はいはい、行くよ」

「……別に行かなくとも良いけど」

「可愛くない」

「……可愛いつて言われても嬉しくないね」

冷静に返すよな、越前。

とにかく……。柚子も頑張るみたいだし、俺も頑張らないとな。
今日はボール触れないとは知ってるんだけどね。

「じゃ、行こうか。越前」

「……一つ聞いて良い?」

「いいけど?」

なんだ?越前からの質問とは?

「なんで前髪あげてんの?女みたいじゃん」

「……………眞うつなよ」

俺、女みたいつていわれることが一番嫌なんですけど……。

「俺の兄さんに強制的にあげられた…………って言つておく」

「なんで反抗しなかったの？」

「したやーしたけど…………。ウン、モウコレ以上言ワセルナ？」

背筋に寒い物が走つたぞ。

…………とにかく！テニス頑張つて、周兄さんにぎりぎりじゃなく勝てる様にならないとな！

…………で結局、主人公誰なんだろうか？目立つ奴だと思つただけどなあ？

中学生様（後書き）

最初はリョーマです！！

陽太は彼が主人公だと言う事を完全に忘れてます（いいのか？って感じですが、後に陽太も知ります。不二（兄）の黒いのが目立つような……。

グダグダ文章申し訳ございません……。

こんな小説ですが、どうぞよろしくお願ひ致します。

山内じゅん子様（前書き）

後書きが活動報告を必ず見て置いてほしいです！！

越前と一緒に、テニスコートがある場所へと向かつ。

「越前は何歳くらいからテニスしてたんだ?」

「……とにかく小さいころから。俺の親父もテニスプレイヤーだから、物心ついたころにはもうしてたかな」

「へえ。早くからやつてるんだなー。」

まあ、俺も一応小さいころからはやってるんだけどな?

それから堀尾とも遭遇し、俺達三人は軽く会話をしながら歩いていた。そんな時だった。

「おつとお

「そん……ブフッ!」

「いつてえ……。顔面ついたぞ?いや、マジでいたい。

誰だと思い前を見れば、ツンツンした髪の先輩が一人立っていた。あーっと、コイツどつかで見たことがあるなあ……?という事はレギュラーキャラかな?

「前見てあるかねえとぶつかるぜ?……ってぶつかったな。大丈夫か?」

「いや、こちらこそすいません……。大丈夫です……」

本当は顔面がジンジンして超痛いんだけどなー……。さすがに言えない。

相手の先輩は、俺と越前を交互に見ている。……つか実際俺の方が先輩なんだよ！？だつて精神的な年齢かなり上だから……言えないので。

「おまえら、これまた随分でつかいバッグ持つてんなあ」

「…………」

放つておけ。俺はこれでも小さめのを選んだんですけど？

越前はといつと、相手の先輩を睨みつけるように見ている。身長差があるから、そう見えるだけなのかもしれないけど。

すると相手の先輩も越前の目線に気づいた様で、眉をひそめる。

「おまえ田つき悪こなあ？」

「…………」

今度は俺の方を見て、ニカツとすんげえ笑う。……嫌な予感。

「おまえはなんか女っぽいな！なんつーか、童顔？」

「…………行ひつか、越前、堀尾」

「あ、おい、待てよー！前見て歩けよお、前ー！」

なあにいがあつー前見て歩けじゃ シンシンがああああッ！

俺はね…童顔って言わるのが一番嫌なんですよ…それが最大級のコンプレックスなんですよ…変えられない事なんですよ…でも言わなくても良いだろ！？

「……不ー」

「あ？なに、越前？」

「怒ってるの丸分かり。しょうがないじゃん？不ー、童顔なんだか
ひひ」

「……カバーしてくれよ」

胸が痛い……。周兄さん、裕兄さん、助けてくれ……。

そんなこんなで俺はイライラを抱えながらもテニスコートに到着。
結構設備の良いテニスコートだな、ここのー

「おおーーーーすが青学、設備いいじゃーん！」

「だなーーーんな所でテニス出来ると毎回と、なんか楽しみだなつ
ー！」

しかしまあ、本当に設備が良いんだ。周兄さん、ずっとこんな所
でテニスしてたんだなあ。

「これから俺も『リコーズ』をしていくのが……。遊びで楽しむことなってきた！」

「よし！ いっちょ派手に入部と行こうぜ！ 越前、陽太！」

「ダメだよー？」

やわらかな明るい声が俺達を止める。声の方向をたどれば、そこには俺達と同じ一年の、水野と加藤がいた。

「今日は三年生としてギュラーの一・二年生達が遠征でいないから、仮入部は明日からだって」

あ、周兄さんの言つてた通りだ。

ヨシ、帰らひじやないか！ といつ氣を込めて越前を見れば全くその気なし……

「僕達はちよつとうつこいつかなつて」

「……陽太、俺達もうつ？」

「は？ まあ、別にいいけど……」

「うかいつのまに陽太って呼ぶようになったんだい、越前？」

んじゃあ俺もリコーズ呼ぼりじゃないか。リコーズ。うん、やっぱり名前で呼ぶ方がいいな。

その時、「一ト内に居た一年生の一人がでてきて、俺達に声をかける。

「おー、おまえら。ひのきのテニス部に入んのか?」

「あ、チイーッス!」

俺とリョーマをのぞめ二人が挨拶をする。……だつて俺、実はまだイライラしてんだよ?・

先輩、つてのを見るだけで何かがキレキレになるのを…・

「一年の、水野カツオです!」

「加藤勝郎です!」

「へへへ……堀尾聰史です。名門の青学に入れて光栄です…」
「うえてもテニス歴は一年でしてー……」

はいはい、自慢ほいいから黙りつづかないかーー一年はわかつたよー

こしても、俺も言った方がいいのかな?よし、リョーマが言った
ら俺も言う事にじみつけー。

「おー、やつちの一人。前は?

「…………」「

俺とリョーマの無言が見事に重なる。言ひづらいからね、正直言つて。

「てめえら、聞こえねえのかよ！」

「まあいいや。……にしても童顔の方、誰かに似てるよ!な……？」

「うん、また何かがキレたよ。小さいけど童顔って聞こえた。

「なあ、実は良いゲームがあるんだけど、やってみねえ？」

「「ゲーム?」」

「あ、アレか……。やつやつー・アレやつでもうわねえとなー」

アレとかゲームで何するか分かると思いませんか、先輩?

イライラするなあ……。ところで俺を童顔って言つた方強いのかなあ?テニスで倒してやらないと気が済まない。

俺を童顔呼ばわりした奴が、コートの端あたりに缶を置いた。

「ルールは至つて簡単。むこうからサービスを打つて、十球以内にこの缶を倒せたら、賞金一万円」

「ええーっー?」

ひつかかるなよー絶対嘘だろー?といつかひつかけだろー?

堀尾達、あの二人の先輩とやうの表情を見てみるー真っ黒だぞ? どす黒いぞ?あの妖しそうな笑みを見たらわかるだろー?

「まあ、入部の儀式見てえなもんだ」

「挑戦料として一人一百円。……やるっ」

「一万円だつてよーー！」

「「当然やるつすー」「」

もう知らない……と言つた感じで俺とリョーマはそれを見ている。

フーンスにゅうくりともたれかかりながら、少し呆れた様な表情で堀尾達を見ているリョーマに話しかけた。

「リョーマは知らないのか？」

「まあね。そういう陽太」「そやうないの？」

「俺、さつきぶつかつた先輩の件でイライラしてんのだ。今ラケット握つたら、缶じやなくてあの二人の先輩狙いそuddだから」

「……ふうん。陽太って童顔つい言葉に反応するナビ、別に気にする事ないと思うよ。まあ、ビツでもいいけどね」

「……そりゃビーム」

あ、なんか頭にのぼつてた血がさがつてきた。

……そつだな、気にする事ないな！ 気にしてしまつんだけど。リョーマに感謝だなあ、こーは。

やつらがここにいる間に田代しゲームをやりはじめた。

柚子　s.yo.e

「あ、小林さんも女子テニス部に入るの？」

……誰だっけ？それが一発目の感想。

女テニス部に入部届けを出しに行いついた時、鉢合わせになつたおさげの女の子。名前は確か……龍崎さんだったっけ？

「うん。やつらも龍崎さんもテニス部？」

「あ、ま、まあねー。小林さんもテニス部何だつたら、一緒に頑張ろうね！」

「うん、そうだね。ちなみに柚子でいいからー。」

そういうえば、陽太はもう入部届け出したのかな？

そんな時だつた。私と龍崎さん、それに小坂田さんの前に女性が立ちふさがる。

「ねえーー！あなた達テニス部へ行くの？それ、入部届けでしょ？はあ、助かつたあー！ねえ、連れてつて？」

「はあ……？」

「ん？ あ、ごめんね！ 紹介が遅れました！ 私、月刊プロテニス編集の（）……ってあなた！？」

「私、早く入部届け出したいんです。来るなら早く来て下さい！」

「え、あ、ああー！ ごめんね！」

なんか足止めくらつた気分だな……。

そんなこんなでゆつくりと私は、この人が求めていいるであろう男子テニス部のコートに向かつた。

side out

ボールがうたれて缶に向かつ……があたらない。

これで水野君と加藤君の二人が終わつた。

「はい、ざんねーん！ 君達一人終わりだよ」

「なんだよ、下手ッぴだなあ」

「そんな事言われても……僕達テニス初めてだし、あんな小さい的に十球ぽっちじや当たるわけないよ……」

「……テニス歴一年！堀尾、行かせていただきまやー。」

「おおーー。」

堀尾はなかなかの自信があるみたいだけど、はたしてどうかな。

一球目、二球目、三球目、四球目……と堀尾はボールをうつしていくが、一球もあたるどころか掠りもしていない。……なんだこれ、ギャグか？

「あれええー……？」

「おこおこ、あと一球しかねえぞー。」

「あくじゅう。ほんの、百球やつてもあたんないよー。」

十球目のボールは、缶に向かっていく。あ、当たるか！？

と思つたがボールは缶を掠めて終了。……あれ？ 缶って軽いから、結構簡単に倒れるよな？

しかも堀尾の打つたボールは結構な所を掠めた。普通だったら倒れるはず。

…………つまりだ。あの缶には、何かがあるってことだよな？

「あの缶、石入ってるね

「あ、やつぱつ？ あ、ちひき系だと思つた……」

「ソソソソ」と叫んだ感じでリコーアマと会話を始めた。やつぱりかいつまつ
系だったか。

「はい、残念でした！」

「やつぱ難しそうですね。挑戦料の一円出すと……」

そう言つと堀尾達三人は一円出すして「年生一人にさし出す。

……とこつかポケットに入つたのか？金入れて部活にきてるのかよー？ま、まあ、漫画の世界だしそこは触れないでおくか……。

「はあ？何勘違いしてんの、お前ら？」

「サーブ、缶倒しゲーム。一球五百円、挑戦料一百円、んで一人あたましめて五千一百円」

「ええつー？そんなあつー？」

「そんなお金持つてないよー。おー」

持つてた方がビックリするつてのー？

「自分の下手さを恨むんだなー！」

「おい、そこのチビと童顔ーお前らも見てないでやれよ。自分だけ助かるうとしてダメだぜ？」

「どーがん……」

「こひこひ反応しない、気にしない。で、勿論やるよな、陽太」

「当たり前じやん！」

時間もかかるので、俺とリョーマで交互にうつてこく事になった。

最初がリョーマ、その後が俺、その後がリョーマって感じで互いに十球ずつうつしていく。

「越前、陽太。やめとけって。絶対あたんねえよ。」

「……普通あてるだけじゃ倒れないよ、あの缶」

「へ？」
「な、何言つてるんだよ？」

「ほう、とぼけますか先輩方？」

「石、入ってるんだろう？簡単に倒れないよ！」

「なつ……」

「はい、先攻リョーマよろしく！」

「了解

リョーマはボールをあげ、それにつっかりと強弱をつけて打つ。

ボールははピンポイントで缶の上蓋にあたり、蓋は見事に外れた。

その中から石がかなりの量ででてくる。

「あーーー！先輩達、ズルしてるーーー。やつたねーのーーー。」

「つるせえーー！新入生が何言つてんだあーー。」

「……お取り込み中悪いけど、次、俺行きます」

「外したらダサいよ、陽太？」

「任せとまつて！」

ボールをあげて缶に回転くよつて。ひ

ボールはゆるやかに回転をしながら、倒れていいる缶にまた当たった。

「うわ、すっげえ！」

「陽太君もピンポイントであてたーーー。」

「はー、次リョーマーー。」

「ウイーッす

リョーマが再びあてる。そして俺もある。

うん、これなら百球でも当たりそうな気がするのは俺だけかな？

「よこよこ十球目。もう面倒くさいし、リョーマと同時に打つ事に

なる。リョーマのボールとあたらないようにしないとな。

「セーのう！」

俺とリョーマの打った二球のボールは、ぶつかる事なく缶に向かつて行つた。

やつぱ百球でも当たりやつだな！

「百球当たら、百万円くれんの？」

アレ?リョーマと被つた。

リヨーマの方を見れば、俺の方を見て、それから小さく笑つてくれた。

「う……………一めえら、一年に向かってその態度はなんだよーああつ
ー?」

訳
?

「ニコニコマーク」で同意する

「……んだとー?」

二人のせこ野郎がこっちに向かってくる。……喧嘩には一応自信あるぞ?

そんな時だった。リコーマでも、俺でもない。誰かが打った一球の球が、放置されている缶に命中する。

「おおーー…当たったよー。」

「ゲ

……この時は、もしかしてだ。

「ラッキーー！」

さつき俺とぶつかり、あげく童顔呼ばわつした奴が、じつひに向かってきていた。

山側じゅん子様（後書き）

アニメ見ながらって結構大変だなあ。

……と思いながらやり終えた更新でした。

さて、皆さま、いつもこの転生の王子様を読んでいただき、誠にありがとうございます。

実は、841にとつての難題、中間テストが近づいております。テスト勉強に励む日を増やしていかねばなりませんので、テスト日 の10月20日と21日までは、しっかりと更新して行けるかは分かりません。

ですが、なるべく。いえ、本氣で!!!頑張って更新していきたいと思います!!

10月20日、21日までは、「できれば」の更新となってしまいますが、どうぞよろしくお願い致します。

一球勝負と王子様（前書き）

部活で心身共々クタクタです……（笑）
それと勉強ですかね。

明日は数学がある……と嘆いている841です。

数学はホントに無理です（苦笑）

一球勝負と王子様

明るい声を出して「」たちに来たのはさつきのシンシン先輩。

「ダメだ、また頭に血がのぼってきた！」

「……おいおい荒井よお。三年がないからって、か弱い一年生を力モつちゃいけねえなあ。いけねえよー！」

アレ？ 実はかなり良い先輩？

「つ……桃、用事あるから先に上がるわ」

「じ、じゃ！」

あ、逃げてつた。……なんか情けねえなあ、情けねえよ？

……と真似してみたが、うん、これって自問自答とやらだよな？
自問自答する先輩か……個性的なメンバーが揃いそうだなあ。

「陽太」

「え？ あ、何？」

「帰りづ」

「あ、お、おお」

まさかリョーマから言つてもうるとはー！

……あれ、そういうえばだけど。あきらかにさつきから今まで、リョーマが一番田立つてるよな？

テニープリで俺の記憶にあるのは、とにかく主人公が田立つてた、だから……。

つ、つまり……リョーマが主人公、だと！？

という事は、俺は主人公に対して、「そんな名前の奴いたっけなんて考えてたのか！？」

……馬鹿だ。ああそうさ、俺は馬鹿さ。

「おい、誰が帰つて良いって言つたよ？」

フリーズしていた俺と冷静なリョーマにかかつた言葉は、そんな言葉だった。

柚子 side

「いじりですよ

つだあああーー私は早く入部届け出したいってのにーー！

井上つて人も合流して、私は記者の一人を男子テニスコートに案内する。……つて、あれ？ 阳太？ それに越前つて子だ。何やつてんだろう？

「あれ、阳太？」

「へ？ なになに？ 小林さん、知り合ひー？」

「あ、まあね！」

「ヨシッ！ 行こ行こ！」

「のあつーちょ、ちょっとつーーー！」

なに！？ 小坂田さんつて、積極的つて言つかなんて言つか！？
ずるずるとひきずられるように、私は阳太と越前君の元へと連行された。

「あれ？ 柚子じゅん！」

「あ、うん……」

「……何、阳太？ 知り合い？」

「まあな！ テニススクールで知り合つた奴なんだ！ 結構強いんだ！」

「ふうん……」

越前君はなぜか私を見る。……うん、阳太のせいだね。

「か、かつこ可愛い……」

な、何語ですか！？小坂田さん！？

「桜乃、それに小林さん！？紹介して！！」

「あ、うん。越前リヨーマ君」

「……と、不一陽太」

すると後ろからやつてきた井上さんが、陽太と越前君みて何か
言いたそうだった。

「へえ～。お前が越前リヨーマで、そつちのどうが……」

「童顔言つな。……じゃなくて、言わないでください」

「え？あ、悪い悪い。そつちの……じゃなくて、そつちが不一陽太
か。越前も不一も、これまた随分とちつちえんだなあ」

「「アンタ誰？」」

あ、越前君と被ってる。……といふかチビつて言われてるし。

陽太、百五十五はあるつて言つてたつけ？まあ、どつちにしろチ
ビ？

「一年の桃城武だ。越前の方、顧問のばあさんから聞いたぜ？ツイ
ストサーブ打てるんだって？それに不一の方は、あの不一先輩の弟

みてえだし?」「

「ゲッ…マジ…?」

ツイストサーブか。……よし、教えてもらおうかな。

「「だつたら?」」

「……つぶす。でるくいは早めにうつとかないとな?」

「なに、俺も?」

「そりやあ勿論?不一一先輩の弟だらうと、容赦なしだ」

「へえ。……楽しみだ」

その時、私は久しぶりに見た。

陽太の妖しげな笑み。とても楽しみそうな笑顔。あの笑顔は……
マジでやるきだ。

そんなこんなで、越前君から、一年の桃城武つて人との試合は始
まった。

サーブはリョーマから、とこつ事で試合は始まった。

「ザ、ベストオブワンセッタマッチ！越前サービスプレイ！」

審判は堀尾か……。アハハ、かわった方がいいかな？

リョーマのサーブ……ツイストサーブか。さて。……盗ろうかな？

「頑張れよー、リョーマア～！」

「ウイーっす

と言えば、リョーマはサーブを打つ。ツイスト……ではなかつた。

ただ単のスライスサーブ。リョーマ、ちやんと打つてくれないと、盗れないじゃん？

「フォルト！」

「…………生意気な野郎めい」

「ヤだ」

「なつー……生意気な野郎めい」

その後もリョーマと……も、桃城先輩？の試合は続き、あと一ポイントでリョーマが勝つという時。

「ちゅうとたんまー」

「……え？」

「やーめたつーもつじーや。次、そっちの不ー」

「はー?途中放棄!ー?」

「とひゅーーーーーおじおじ、変な言い方すんなよー?」

でも……桃城先輩、足怪我してるみたいなんだよな。
つヨーマは氣づいてると思ひけビ、堀尾とかは知らない。そして、
びひょりかなあ?

流石に一ゲームは無理だわからな……。よし!

「桃城先輩!一球勝負、しましょーつーーー」

「はーーー?」

「一球勝負です!一球だけ!落とした方の負けっス!ー

「ちよ、待てよーなんで一球……!ー?」

俺は俺の足を指さす。……意味、わかつたかな?

……ああ、分かったみたいだ。困ったような顔して。まあ、いいか?

「わかつたよ。んじや、一球だけな。……フイツチ?」

「じゃあ、スマースで

「Jのサーブは貴重だなあ？ 貴重だよ」

自問自答はいいですって。

ラケットが回転し、カシャンと倒れる。

「……スマースだ。不二からだなー。」

「……どもっす」

えーっと、確かにヨーマはツイストをこんな感じで……。

一球勝負。落とせば終わり。……負けるわけにはいかないし、俺
は負けるつもりはないよ？

「んじゃ、俺からサーブ……行きますー！」

リコーサイド

俺が出会った相手、不二陽太。

第一印象は、女っぽい童顔の同性。でも話をすれば、テニスをするって事がわかつたりして、案外話しやすい奴、なんて思つて。

童顔、つて言われたら怒つてんのが丸見えで、少し笑つた。

そんな陽太は今、一球勝負中。ツイストサーブは初めて見たようだつたけど、どんな感想抱いたんだろう？

「んじゃ、俺からサーブ……行きます！」

お手並み拝見、と言つたところかな。

俺が見た限りでは、陽太は強い。だからこれが終わつたら、試合だつてしてみたい。

そんな時だ。陽太が打つたサーブは……ツイストサーブ。

「なっ！？」

「……」

俺と同じサーブは、あの先輩の顔に向かつて飛んでいく。

……結構スピード早い。もしかしたら、俺のサーブより早いかもしれない。

桃城つて先輩はギリギリでそのボールを避ける。

「なっ……！」

「……うん。はじめてのわりには、結構良かつたかな？」

「は、はじめて！？」

俺と桃城つて先輩の声が重なる。……つまり、俺のサーブを真似したって事？

しかもはじめてのわざにはまって……。俺よりも早い気がしたんだけど。

「つて、桃城先輩？一球勝負終わっちゃいましたよ～」

「ま、マジかよ……あ、アハハ。終わっちゃったなーー！」

……そりゃ笑うしかないよね。

「じゃあ……今度は、しつかりとしたゲームしまじょうね？」

「え、あ、ああーもうひるんだーー！」

「こよひーこーりコーーマ、帰るひーー

「…………わかった

おもしろっこ奴、見つけた。

退屈せずにすみそうだ。

「…………やめじゅん

れいと、こつアンタと勝負できるかな？陽太？

一球勝負と王子様（後書き）

今回はリヨーマ田線も入れてみましたー！

と云ふか本当にグダグダスイマセンー！
自分なりに一生懸命やつておつましく……。
……これから勉強してきますーー。

数学の提出物を頑張つて終わらせてきます（泣）

読んで下さつ、誠にありがとうございました。

一年生HIMI子様（前書き）

くわう、早く試合に移りたい……。
と思う今日この頃です。

なるべく早く更新できるように頑張りますーー。

ボキゴロベキイツ――

あれ? 今何か、すんごい音しなかつた? 右肩回したらコレだ。
あ――。昨日の無理矢理ツイストのせいだな。超肩いてえ――
。今度はしっかりとリコーカに教えてもらおうつと。

「あ、そういえば今日は周兄さんがブヘフッ――」

「チイーッス」

あつたまいてえ――! リコーカ機嫌にも挨拶をしてきたのはリコーカ。
すがすがしい微笑で、テニスバッグ頭におもいつきじぶつけでき
たぞ! ? なんだこいつは、悪魔か! ?

「チイーッス、じゃない! ! かなり痛かつたんだけど! !」

「独り言を言つてゐる陽太が悪いよ」

「はあ! ? 独り言を言つてたら俺はバッグぶつけられんのかよ! ?」

「……うん」

「どうこう理屈だよ! ? といつかその間はなんだよ! ?」

はあ……まあいいか。ジンジンするけど。

昨日のツイストのおかげで肩がおかしい。……まあ、初っ端からあれはな？でも、勝てたからいいんだけどな！

「陽太」

「なんだよ？」

「右肩、大丈夫？」

「あー、大丈夫大丈夫……つて、え？」

俺、まだリョーマに肩の事なんも言ってないよな？

「え、つて……。顔見てたら辛そうだし、右肩の方がちょっと上がってる。大丈夫なの？」

「あ、うん。……ありがとな」

「別に礼言わることしてないと思つけど。またツイスト教えようか」

「お、嬉しいな！」

リョーマの印象が、最近すこく変わってきたのが分かる。

最初は無口でクールな奴、なんて思っていた。だけど、今ではすごく優しい奴。まあ、たまにムカつくんだが、それが友と言う奴なんだろうな。

俺とリョーマは「コート」に入り、隅の方で準備を始める。そんな時だ。

「……で、おかしいと思つたんだよ」

「なにがだよ、堀尾」

「あの桃城つて先輩、足を痛めてて実力の半分も出でなかつたらし
いぜ?」

「え? 怪我してたの?」

「全然見えなかつたけどなあ」

そんなこと知つてるんだけど、堀尾。

だから俺は一球勝負にした。……マジの一球で終わつてしまつた
んだけどな?

「……だから」の前いたんだよー他のレギュラー陣は試合でいなか
つたからね!」

呆れたよ、堀尾。……お前は何が言いたいんだ?

リョーマと田を合わせれば、同じく溜息をついていた。……そり
やそりだよな。

「おい。聞いてんのかよ、越前、陽太!」

「「全然」」

……って言つてゐる時点で聞いてゐ事になつてんだけね。

「む……まあね、一年のお前らがレギュラーと互角の筈がないよな」「

「リヨーマ。俺、準備できただけど？まだ？」

ちよつと待つて……つと。できた。軽く打つていいのかな？

いいんじやない?

「お前ら無視しそぎだつてば！？」

な。堀尾……喋つてゐ暇があつたら、ちよことは何かすればいいのに

と、そんな時。ニユツと一人の一年が俺とリヨーマの前に立ちふさがる。……また一年かよ。

「凄い一年ですつげえ強いってのはお前らか？」

「凄い一年？」

「……すつげえ強い？」

……誰だよ、そんな噂を流したのは。

「俺らじゅ……ないつすよ」

「は？あ？あうのかよ？」

「ナウリす」

……ヒヒヒヒ失せうよ。

おつと、本音が出そつだ。俺はそれを抑えて、かなり頑張って笑顔を見せた。

「俺りよつも凄い奴、こまよかな、リヨーマ？」

「う」と

「じゃあ、まだよ？」

俺とリヨーマは顔を見合わせる。……よし。

一人で同時に振り向き、うんちくばかり凄い堀尾の方を指さす。

「「アイツ」

「アイツか。……なるほどな。一人派手なウェアで立つてやがるなあ。よし。」

「サテト、ヤロウカ、リヨーマ」

「言ひだす」

すまない、堀尾……そんなつまつはなかつたんだよ……！

と、朝練は終わり、俺とリョーマは教室で話をしていた。席はちよつと離れてるから、俺がリョーマの席の所に行く。

「……荒井先輩だつけ?なんかほんとイラ
ー」というかさ、あの先輩。

「童顔って言われるから?」

「まあ、分かんぬもないけど。ああいうの、やりがいありそう」

「潰しがい、つてことか？……確かに。俺、荒井先輩とやつて痛い目見させたいなあ」

「発言黒いよ、陽太」

「え? サンデー?」

黒発言をしたつもりはないんだけど……。

あ、周兄さんの黒属性をうけつい……もうこれ以上言わないでおこうか。開眼はかなり怖いから。

「陽太、肩は？」

「ああ、大丈夫。いざとなれば左使えるし」

「え？……陽太も両利き？」

「あ、まあね。リコーカメラもだろ? 昨日左に持ち替えよつとしてたし。俺、右利き。でも一応左も使えるんだ」

「俺は左利き。……逆だね？」

「確かに。 なあ、 今度ツイスト教えてくれるのか?」

「もがね」

「ありがとうな！でもひて、また試合しような！」

- 553 -

よし、約束成立了！

そしてダルイ授業も終わり、いよいよ部活！あ、今日は兄さんがいるんだっけ？

まずは走り込みから始まつた。……堀尾とかゼーゼー言つてるけど、大丈夫か？隣で走るリヨーマは至つて普通の涼しい顔なんだけど。

ぶつちやけ俺もあんまり疲れてないな。

「大丈夫か？堀尾？」

「お、おお、陽太サンキュー……大丈夫だ……つてお前なんだよその涼しい顔はーー！」

「うえ？あ、いや、つ、疲れたよ？」

「嘘つけえええつ……」

「嘘じやねーよつー！」

「めん、嘘です。リョーマの方を見れば、「まだまだだね」とか咳いてた。

休みがあるわけもなく、次は腹筋五十回。……うげ。俺、腹筋はあんまり得意じゃないんだけどな。

「陽太、やひり」

「え？ああ、いいよ

まずは俺から。一、二、三、四……ひとつ。

やっぱ腹筋好きじゃないなあ。でも、だいぶ前よりからは楽にできるようになってきたかな。

「五十……ひとつ」

「へえ、早いね陽太。じゃ、次俺ね」

「よし。ちちんとおれのから、頑張れよ」

「当然

……つてコヨーマ腹筋スペード早っー！

いいなあ、腹筋得意って。あ、でもさつきコヨーマは早っこって言つてくれたつけな。

と物思いに漫つていれば、既に数は四十九ー！

「五十……つと」

「……あ。コヨーマ、何か来たよ

「……なにが？」

俺とリョーマは、同時に一年の荒井とその後ろに居る一人を睨みつける。

……なんか言いたそудだな。そんな時、荒井……でいいよな。先輩つけんのも嫌だし。荒井は俺とリョーマのバッグが置いてあるところを見る。……あれ？ 狹われてんなあ。

「お前、少しくらいできるからって、調子こいてんじゃねえぞ。
童顔の方は不一先輩の弟つて聞いたけど、せいぜい不一先輩に迷惑かけないよしひじりーーー！」

「……んだよ。アンタらが俺らに干渉するから、俺とコヨーマがこざり巻き込まれてんじやん

「陽太の言つとおつだね

「なつ……！－てめえら、マジで調子こいてんなよ！－ああつ！？童顔の方！不二先輩の弟なら、もつとしつかりしとけ！」

「周兄さんの名を俺達のもめ合いでそんな簡単にだすな！！」

いちいちいちいち不一先輩不一先輩つて！！兄さんは関係ないだろ！？

だ―――つ―――もうホンっとに鬱陶しいな―――

「ま、まあ……。とにかく、今日はレギュラー陣が帰ってくるんだからな。あんまり生意気だと、」の荒井様が……」

「あ」

「あ、あた……！」

きた？なにがだ？

そう思い、みんなの見ていく方向を見る。……そこには、噂の青

学レギュラーがいた。

先頭に居るのはバンダナをつけた先輩。その次が、四角い眼鏡をかけた先輩。次は何処か真面目そうな、坊主頭の先輩。お次は俺の兄さんだ！！最後は頬に絆創膏を貼った先輩。

うん、個性豊かそうだな！！というかバンダナ先輩なんか恐

「「チイーツス！」「

全員が挨拶をすれば、坊主頭の先輩が優しく笑って言った。

「新入生も部の雰囲気に慣れてもらいたいから、空いてる『ポート』で自由に打つても良いよ」

「「は、はいつ！」」

みんな、「ヨツシャーツ！」とか言ってかなり喜んでるなあ。

……つと、周兄さんだ。目が合えば、二人で小さく笑いあつた。
なんか兄さん嬉しそうだなあ。

「陽太！」

「ん？ デウしたんだ、リョーマ？」

「打つていいらしいから、今度こそ打とつよ」

「あ、うん！」

さてと、右肩をちょっと慣らさないとなあ……。そういうや、周兄さんには何も言つてないけど、ばれてんのかなあ。

そんな中、レギュラーのアップは始まった。

ああ、見たことあるな。一人がロープを出し、それを置いてあるかごに向かってスマッシュで入れる。周兄さんと裕兄さんがやつてたな。

「あ、相変わらずだな、うちの先輩達は……。おい、分かったか！
まぐれくさいツイストサーブが打てるからって、お前、一年の出る
幕はねえんだよー！」

……ダメだ。いちいち腹立つ。

と、そんな時。少し大きめのロブが、リョーマに向かう。

……打つ気だ。リョーマは綺麗なフォームで、そのボールを打ち
返す。ボールは結構なスピードでかごに入った。

「なつ……」

「…………」

「う、嘘だろ…………」

みんな放心状態。……まあ、そりゃあそ such かな。

あれ。……周兄さんは相変わらず笑ってる。さ、さすが？

いち早く我に返った荒井が、リョーマに突つかる。……いい加
減にしうよ？俺だって我慢の限界があるよ？

「はい、そこまで～」

「つーっ！」

「いい加減にして下せー。それに、コート内でもめたら……」

「コート内で何をもめている」

俺の言葉を遮ったのは、堅苦しそうな、それでも力強い声。

……わお、これってホントに中学生？ちよつと年齢疑うね！
ゲフンゲフン。きっと部長だろ？眼鏡をかけた身長の高い先輩が、
コート内に入ってきた。

「「部長！チイーツス！」」

「……騒ぎを起こした罰だ。三人とも、グラウンド十周」

って俺もかよ！？

「ちよ、ちよっと待つてトセコヨー」「こつが……」

「二十周！」

んなああああっ！？「チイツ追加せられやがったあっ！？

……まあ、いいけど。

「陽太。行こう」

「うん」

俺とリョーマはグラウンドに出て、のんびりと走りだす。

「陽太。さつき、サンキューな

「え？俺、何かしたっけ？」

「…………氣づいてないならこいよ」

「はい！？教えてくれないのかよ！？」

「…………」

「無視すんなよー！」

「喋りながら走つてたら体力消耗するよ？」

「あー、そつだな。…………つて違うつー！」

よくわからんが、とこかくしヨーマの役に立てたって事でいいか？

一年生ヒロ子様（後書き）

ギャグが一ガテです……。
はあ、疲れました。

もう本当にグダグダな文章で申し訳ございません……！

感想を下さるお方、お気に入り登録をして下さるお方。

この小説を読んでくれているお方、誠にありがとうございます……！
これからも頑張っていきます……！

ボロケットヒロ様

その後俺とリョーマは走り終え、コートに戻った。戻れば一年生は素振りをしている。

「あ、リョーマ君に陽太君。もつ終わったの？」

「うん。次、何したらいいんだ？」

「ちょっと辛そうな力チロー君に聞いてみる。……いや、本気で辛そうだ。大丈夫か？」

「一年は素振り百回だつてよー早く入れよー。」

「あ、うん……」

「どうしたんだ?リョーマ?」

なんか困ってる?周りを見回してるけど……探し物か?つて、ラケットないのか?

「リョーマ、ラケット忘れたのか?」

「…………せ

「んあ~……。俺の真似してやるー。」

「どうも。……って言つても、陽太のラケットもない様な気がするんだけど?」

「……は?」

「おお、本当じやないか。……ラケットがない。」

おおかたあの一年の仕業だらうな。リョーマと俺のラケットを隠す、か。よし、探してやうつかな。俺、かくれんぼで見つけんのは得意だからな。

「ラケットも持たずに来るとは、いい度胸じやねえか」

「……」

きた。……荒井と取り巻き風の一人。すんごい悪そうな顔してんなあ。

「素振りなんか必要ねえってか?」

「期待の新人君、それに天才不一周助の弟だからってちやほやされてるからな!」

……ちやほやされてるつけ?まあ、されてるつて事で良いか。

「陽太」

「ん?どうかしたか?」

「……珍しいね。陽太は熱血だから、怒つてんのかと思つた」

「熱血つて……ま、よくキレるけど。なんかもう慣れてきたよ」

「へえ

熱血つて言つか……うん、大人になれ俺。いちいち反応するなー。怒るなー！

……と書つかマジで慣れたんだよな、この一年生達に。さて、ラケットどうするかな。このままじゃ素振りもできないし……マジで探そつかな。

「そんなに自信満々なら、相手してくれよ?」

「そつちの童顔も、自信あるんだから、やめやめさへいりうべりうだし。なあ?ほり、相手してくれよ?」

「でも、ラケットが無いんじゃなあ?」

……童顔にもなれたな。リョーマにも言われるくらいだし。

さて。……何をしかけてくるかな?

「ほい、荒井」

「……フン」

荒井はリョーマに、ガットも緩くて、とても汚れている古っラケットを投げつける。

俺には物凄く意地汚い笑顔をよこして見た。

「お前は」のチビを潰した後で、この荒井様が相手してやるよ

「…………そりゃそりゃ

ま、とにかくリョーマが潰してくれるだろ。……リョーマに勝てるわけないじゃん？ 荒井みたいな奴がさ。

いや、頑張れば行けると思う。でも、こんなことしてたら、いつもたつても上手く慣れないよ？

「で、相手してくれるよな？ 期待の新人君よお

「…………」

さて、リョーマはひづかんのかな。俺はリョーマの後悔じいからな……。

周兄さんの方を見れば、相変わらず笑ってる。……兄さん、笑つてないでなごとかしてくれよ。

「はつーー一年のお前にま、そのラケットがお似合いだぜ。これにこりてー一度とでしゃばんじやねえぞー！」

「リョーマ……」

「おー、そりゃのー……お前がやるか？ 運がよければ、ラケットもでてくるかもしねえぜ？」

「……」

「……………。ちよつと笑つてコニー
マを見た。

コニーも俺も見て、小さく笑つた。……………。勝ったラケット
は本当に売つてくれるのかな?

「……………。さつじんがー、コニー、ラケットー。」

「……………行けんの?」

「……………。せせとせつて。……………絶対ラケット取り返すからな」

コニーからボロボロのラケットを受け取り、俺は「バー」に入る。

「あれ? 荒井、まだコートに入つて無いじやん?」

「やらないんですか? ……俺、準備万端ですか?」

「ひ……………」

……………あ。周兄さんの視線を気にしているんだ。そんなのいいのに

10°

さつきまで俺の事を余裕で侮辱してたわけだね。お手本すべし。
つて、兄さんに笑つてゐる。楽しそうだな。

「……………。こいつ胸だ。」てことを潰してやる

「へえ～。……楽しみですね」

思いつき笑つてやつた。これ、一番良い笑みだと思ひ。

「わ、やつましょつか！」

こつもの仕返し。……行つて見よつー。

……サーブは荒井から。っと、このラケットでどひやつたらひまぐ返せるかな？普通に打つてもきっとダメだらうしな……？

「行くぞおッ！」

「…………」

周助 side

「行くぞおッ！」

始まつた。二年の荒井と、陽太の試合。……陽太、凄い笑顔だね。余裕丸見えつて感じかな？

荒井がサーブを打つと、陽太はそれに余裕で間に合いうかつた。振る。ボールはあたつた。けど、ネットにひつかつて落ちた。

「ああっ…………！」

「やつぱつ……あんなラケットトジヤ無理なんだよ……！」

「……おいらおらだつした？一度でかい口をきいたんだ。最後までやつてもらうぜ。……オルア！」

再び荒井はサーブを打つ。再び陽太はボールを打ち返す……が、ハンドトロールがうまくいっていない。

ボールは荒井を超えると、フヨンスに当たつて落ちる。

「……陽太」

ねえ陽太。……右腕を動かすたびに、なんでそんな辛そうな顔をしてるんだい？

「うーん……」

「どうしたんだよ、不二。弟が心配なのか？」

「あ、いや。試合については心配ないんだけど……。ちょっとね」

「不二の弟、どんな実力なんだろうな」

「ああ。……そ」は心配ないよ」

陽太が負けるわけないだろ？……ほら。凄く考える顔してると。

「英一、乾」

「ん？どうした？」

「……陽太は負けないよ？しつかり見ててやつて？」

「へえ～。凄い自信だな、不二～」

「まあね。……僕の弟だし」

「……不二は大の弟好きというデータが取れたな」

あれ？乾、今さら気づいたのかな。

陽太だけじゃないけど、ね。裕太も姉さんも、僕は家族は大好きなんだけどなあ？

「……おつもしろいなあつ！」

「……つ！？」

陽太が明るく声をあげれば、荒井は酷く驚いた後、意地悪気な笑顔を見せた。

「……てめえに勝ち目なんかねえだろ！つが！」

荒井がサーブを打つ。と同時に陽太はかけ出し、体をグンと引く。

そのままボールのタイミングに合わせて、体を回転させた。ボールは見事に荒井の「一トヘとかえつていった。

「か、返した……！」

「マジかよ……」

「ねー。体を回転させヒスピントかけてやー」

「……流石だね」

もう一人の一年の方を見れば、陽太と笑い合っている。

「あのラケット、意外とぼろくないのか！？」

他の二年生が何か叫んでいる。

ええーつ！？それはないだろー！？

音が変だしよ~

.....
.....

陽太は溜息をついている。その横ではもう一人の一年。越前リョ
一マ……だっけ？

が陽太を見て小さく笑つてゐる。

「ふ……ふざけるな……一球返したからって……」

「一球？ああ、もう一球どうぞへ……何度でも返してやるよ」

陽太の童顔が、その時は凄く大人っぽい顔に見えた。

「さ、さすが不二先輩の弟……」

「天才・不二周助先輩の……」

「違うよ」

一年生達が咳くから、僕は今度こそ言つてやつた。

「陽太は陽太。僕が兄とか……関係無いよ」

「へつ！？あ、す、すいません！」

ねえ、陽太？君は僕に対してどんな感情を抱いてるのかな？

……裕太と同じように、君も行つてしまふのかい？

「……おーい、不二！」

「え？あ、ああ。」めん英一

「いや？ボーッとしてたから、大丈夫かなーって」

「……ありがとう」

陽太は何球も返していた。……コツは掴んだみたいだね。

荒井はかなり焦っている。そんなの、陽太に勝てると思う方がおかしいよ？……言つたら悪いかな。

「……来るな、アイツ」

乾が呟いた。……そう、陽太は来る。僕達と同じ場まで。

「ああ。それに、もう一人の方もね」

越前リョーマ、の事だね。……そうだな。あっちもきそだね。
つてアレ? 越前リョーマが……いない?

「ちっくしょ! ……！」

「……ねえ、先輩。そろそろ終わりにしません?」

“やるだけ無駄ですよ”なんて言葉が聞こえた気がして、少し笑
つてしまつた。

「俺は……負けません、からつーー！」

「つーー！」

荒井が打つてきたサーブを、陽太は思いつきり打ち返す。

さすが。……もつ完全にコントロールしてゐるや。

「つと……。陽太ーー！」

「ん? ああーリョーマつーー！」

あ、戻ってきた。……つてラケット持つてる。探しに行つてたん

だ。

陽太は自分のラケットを持つと、にんまりと笑った。

「先輩？ちやーんと、最後までやつてもらいますよ？」

「俺もつすよ？……とにかく、するんでしょ？」

「あ、いや、そ、その……」

あはは、ひいてるひいてるー。

「も……、もういこんじやねえ？」

「たかが“練習”試合だぜ？」

「そ、それにもう一人の方もまた今度やればいい事だし……」

「「……ヤだ」

あ、ハモつちやつてる。

にしても……帰つたら、右腕……肩かな？しっかりと見せてもらわないとね！

s i d e o u t

大石秀一郎 s i d e

不一陽太。……あの不一の弟で、その才能は素晴らしい物。

越前リヨーマ。……竜崎先生が言っていた、噂の一年生。

「どう思つ、手塚？」

「……規律を乱す奴は許さん。全員走らせておけ」

「え？……レギュラー陣もか？」

「全員だ！」

そう言つと手塚は教室を出て行つた。……やれやれだな。

「……おやあ？」

「?.どうかしたんですか、竜崎先生？」

「いやあ、これを見てみろ」

さしだされたのは、ランキング戦のトーナメント表。

「ああ。全く。本当に手塚は。

「越前リヨーマ、不一陽太。両方書いてありますね」

さて！これからが楽しみだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3292x/>

転生の王子様

2011年10月18日23時13分発行